

明石入道論

大井田 晴彦

はじめに

明石女御が春宮の第一皇子を出産した、という朗報は、明石の地に直ちに伝えられた。間もなく明石君と尼君への入道の手紙が届いた。使者の大徳によれば、消息を認めた後、愛用の琴と琵琶を寺に奉納し、身辺の整理を済ませた入道は、わずかの供を連れて入山を遂げたのだという。

娘にあてた手紙には、妻が明石君を懐妊した時に見た夢を契機として、一族の復興に執着するようになった経緯が詳細に綴られており、さらには極楽での再会が約束されていた。一方、妻への手紙には、いかにも出家者らしく簡潔に、やはり来世での再会を記してあるのだった。昔、入道の見た夢の内実がここで語られるに及んで、ようやく彼の奇矯な言動の根拠が明らかとなった。あらためて入道の思慮深さと家族への愛情を知るにつけても、妻と娘は感涙にむせぶのであった。

入道の手紙を眼にした光源氏もまた、深い感慨を抱かずにはいられない。入道の身の処し方を称賛し、かつ入道との運命的な絆

に思いを馳せるのだった。

本稿では、この明石入道という特異な人物を取り上げ、その人物像と造型について考えてゆきたい。「名門の血の回復のため、栄光の座の鬼となつてゐる人物」^{〔1〕}なども評される、その強烈な個性が印象的な入道は、それゆえにか、あまり正面から論じられることはなかったように思う。しかし物語において重要な位置を占める、いわゆる明石一族の物語は、入道の凄まじい情念に発しているのであり、また源氏の運命をも大きく突き動かしているのであつて、決して脇役として軽視すべきではない。しばしば「ひがもの」との形容が繰り返される入道であるが、その性格は複雑で一筋縄にはゆかない。実は、かかる入道のよき理解者が、他ならぬ源氏と思われるのである。これまで明石君や尼君との関連で論じられがちであつた―それは当然のことだが―入道を、源氏との関わりから捉え直してみたいと思う。

入道の存在が初めて話題となるのは、若紫巻においてである。源氏は、良清から、明石に住む「ひがもの」の入道の噂を聞く。良清が入道の消息に明るいのは、播磨守の子であるためである。

かの国の前の守、新發意の娘かしづきたる家いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、まじらひもせず、近衛中将を棄てて申し賜れけりける司なれど、かの国の人にも少し侮られて、「何を面目にてか、また都にも帰らむ」と言ひて頭もおろしはべりにけるを(中略)、深き里は人離れ心すこく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれる住まひになむはべる。(中略)京にてこそ所得ぬやうなりけれ、そこら遙かにいかめしう占めて造れるさま、さはいへど、国の司にてしおきけるとなれば、残りの齢ゆたかに経べき心がまへも二なくしたりけり。後の世の勤めもいとよくして、なかなか法師まさりしたる人になむはべりける。」(①二〇二―二〇三)

既にこの時点で、入道の人物像はかなり輪郭を鮮明にしている。大臣の子息であった彼は、中将の職を擲って、受領に身を落とし、播磨へと下った。元来、「ひがもの」である彼は、都でも人づきあいを好まなかったが、任国でも民との関係が険悪である。帰京しても人々から軽蔑されるだけなので、出家して土着してしまっ

た。受領として貯えた財によって豪壮な邸を構え、風流な暮らしをしている。極楽往生をめざして仏道修行も怠りないという。

源氏の関心は、もちろん偏屈な入道にはなく、娘のほうに向いている。そのような変人の父に傅かれている娘とは、いかなるものだろうか。良清は続けて次のように言う。

けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらけりけりかず。「我が身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人一人にこそあれ、思ふさまことなり、もし我におくれて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と、常に遺言しおきてはべるなり。

(①二〇三―二〇四)

娘をめぐつて、国司たちがごぞつて求婚するが、父入道は歯牙にもかけない。入道は、もつと高貴な家との縁組みを企図しており、それが果たせぬなら海に身を投げよ、と口癖のように娘に言っているのだという。従来、ここは、明石君の年齢に関して不審とされてきた箇所である。明石巻の「住吉の神を頼みはじめたまつりて、この十八年になりはべりぬ」(②二四五)という言葉を、明石君の年齢とほぼ等しいと考えると、若紫巻では九歳ほどになり、国司たちから求婚されているというのが不自然になる。若紫巻で十二、三歳くらいとする考えもあるが、「代々の国の司」から求婚されているという記述にはなじまない。適齢期になる前か

ら縁談があったとすれば矛盾は解消されるが、やや疑問は残る。とりあえず明石君の年齢を十八〜二十三歳と仮定しておけば支障あるまい。そもそも物語は、明石君の実年齢には関心を払っていないのである。物語にとってより重要なのは、年立上の整合性を図ることではなくて、若紫巻で明石君を登場させておくことだっただけである。何となれば、明石君は、紫上の対となるべき人物であるからである。その紫上といえは、娘を「内裏に奉らむなどかしよういつきはべりしを、その本意のごとくものしはべらで過ぎ」(①二二二〜二二三)てしまった故按察使大納言の孫娘であった。若紫巻では、二つの没落した「家」の歴史が語られており、その結節点に位置するのが光源氏―彼自身、故按察使大納言の裔であった―なのだった。結局、紫上の按察使大納言の「家」の物語は、主題化されることはないけれども。なお、明石巻での入道の年齢は「年は六十ばかり」(②二三八)とある。明石君の年齢をどのように考えても、四十歳前後の、高齢になってようやく得た一人娘であることが重要である。明石君は、神仏の加護によって生まれた申し子的な性格が顕著である。だからこそ、入道は、この娘に一族の命運を託すことを決意したのであった。

良清の言葉にあるように、入道は、大臣の子でありながら、都での出世に見切りをつけ、受領として明石に下ることを決意した。大國である明石は、農業・漁業・製塩・交易などの多角的な経営によって、莫大な利益の見込める土地であった。²⁾名門の子息が受

領に身を落とすことは、周囲の蔑視もあり、耐え難い屈辱であろうが、入道は、名誉を棄てて実を取るのである。入道のかかる決意が、きわめて現実的な判断に基づくとはいえず、異例であることは、当時の貴族社会の現実にも照らしても明らかである。『河海抄』は、左中将から陸奥守に転じた藤原実方を入道の准拠として掲げている(ちなみに『岷江入楚』は、藤原山蔭の例を挙げるが、中将から備前守に転じたとするのは誤りで、准拠とは認められないとする阿部秋生氏の説がある³⁾)が、いずれにしても希有な例といふしかあるまい。

物語に眼を転じると、『うつほ物語』のいわゆる三奇人の一人、三春高基の例がある。高基は素性卑しい女を母とする皇子であったが、若い頃から諸国の受領を歴任し、その徹底した儉約と、苛斂誅求とによって膨大な財をなし、近衛中将・中納言、さらには大臣にまで昇り詰めた。「一国を治むるに、公事全くなして、私物数多く貯ふ」「京のうちに誇り笑ふこと限りなし。それを知らず顔にて、交じらひたまふ。御心のかしく、政をさしくて、荒るる軍、獣もこのぬしには静まりぬ。さるによりてなむ、朝廷も捨てたまはざりける」(藤原の君・八五〜八六)などと、誇張を加えながら、受領層の生態が活写されている。

おとど、「朝廷に仕うまつればこそ、人のなきも苦しけれ。畑を作りて、一人二人の下衆を使ひてあらむ」とて、位を返し奉りたまひ、例なきことのためふ、「つきなき身にて、高

き位用ゐるべからず。山賤らを従へて、田畑を作らむ。この位を返し奉りて、人国一つを賜らむ」と申す。「さも言はれたり」とて、大臣の位をとどめられて、美濃国を賜ひつ。

(同・八九)

高基の吝嗇ぶりは常軌を逸しており、大臣の職を擲つて、受領へと転じることになる。まさに「例なきこと」である。物語史において、入道の先蹤がもう一人いる。同じく『うつほ物語』の秘琴の一族の祖、清原俊蔭である。長年にわたる異国での漂流から帰国した俊蔭は、時の帝と衝突し、宮仕えを辞した。世間との一切の交わりを絶ち、ひたすら娘への秘琴伝授に専念するのだった。「娘は、天道に任せ奉る。天の掟あらば、国母・夫人ともなれ。掟なくは山賤・民の子ともなれ」(俊蔭・二二二)と、帝や春宮をはじめとする人々の求婚を厳しく退けるのであった。妻を亡くした、その失意のせいであろうか、病を得た俊蔭は、娘に遺言を託す。

「我、ありつる世には、我が子に高き交じらひもせさせむと思ひつれども、若くては知らぬ国に渡り、この国に帰り来ても、朝廷にも適ひ仕うまつらでほど経にければ、貧しくて、我が子の行く先の掟せずなりぬ。天道に任せ奉る。我が領する莊々はた多かれど、誰かは言ひ分く人あらむ。ありとも、誰か言ひまつはし知らせむ。ただし、命の後、女子のために気近き宝とならむ物を奉らむ。」

(同・二二二)

美しい娘を持つ当時の貴族の常として、俊蔭もまた、娘の入内を志していたのであった。しかし、当時の貴族社会の現実からすれば、仮に入内し、皇子が生まれたとて、その皇子の即位の可能性は、まずない。自身の死後、莊園が他者に渡ってしまう、という嘆きも極めて現実的である(松風巻、大堰の邸をめぐる入道と宿守のやりとりも想起される)。かかる閉塞した現状をしっかりと見据えるところから、「天道」に娘の命運を託し、秘琴の加護を願うのである。「掟なくは山賤・民の子ともなれ」という厳しい言葉には、「その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」との入道のそれに通ずる響きがある。この後、この一族が数多の苦難を経て、栄華を獲得していくことは周知の通りである。しばしば指摘されるように、音楽伝承譚・一族の繁栄譚ということで、俊蔭一族と明石一族の物語は、構造的に一致している。³ いったんは沈淪に苦しみつつも天や神仏の威力に導かれて、運命を大きく切り開いていくという構造が、見事に重なるのである。しかしながら俊蔭に較べ、入道の姿は変人で滑稽にすら見える。入道においては、当初は奇矯な言動の根拠が示されず、後の若菜上巻にはじめて明らかにされるといふ事情によっていよう。対して、俊蔭の場合は、当初から「この山の族、七人にあたる人を、三代の孫に得べし……その果報豊かなるべし」(同・一八)という天人の予言が読者に知らされていたのであった。

それはそれとして、都を離れた明石の、風変わりな父娘が、自

分の人生と大きく関わることになるとは、北山の光源氏は全く想像だにしていなかったに相違ない。

二

光源氏が須磨に下った噂は、「ただ這ひ渡るほど」(須磨②二〇九)の明石の地にただちに伝わった。入道の悲願達成の好機がついに到来したのである。

世に知らず心高く思へるに、国の内は、守のゆかりのみこそはかしこきことにすめれど、ひがめる心はさらにさも思はで年月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺更衣の御腹の源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨の浦にもしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君に奉らむ」と言ふ。母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻どもいと多くを持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山賤を心とどめたまひてむや」と言ふ。腹立ちて、「え知りたまはじ。思ふ心ことなり。さる心をしたまへ。ついでして、ここにもおはしまさせむ」と、心をやりて言ふもかたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。母君、「などか、めでたく

明石入道論(大井田)

とも、もののはじめに、罪に当たりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても、心をとどめたまふべくはこそはあらめ、戯れにてもあるまじきことなり」と言ふを、いといたくつぶやく。「罪に当たることは、唐土にも我が朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとも人にことになりぬる人の必ずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのがをぢにもものしたまひし按察大納言の御娘なり。いと警策なる名を取りて、宮仕へに出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人のそねみ重くて失せたまひにしかど、この君のとまりたまへるいとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おのれかかる田舎人なりとて、思し棄てじ」など言ひあたり。

(同②二一〇～二一一)

入道が国司ふぜいなど一顧だにせぬことは、若紫巻でも語られていた。この前文には良清の求婚が語られるが、入道は、婿となるべき光源氏への取り次ぎ役としか思っていない。源氏が須磨に流れ着いたのも、娘の異数の宿世ゆえと確信する入道は、二人の結縁について尼君に相談する。しかし、尼君は難色を示す。罪人であり、都に多くの妻妾を持ち、妃とも醜聞のあった源氏が、田舎育ちの娘を相手にするはずもない、というのがその理由である。いったい、この尼君の造型は、思慮分別に富む良識人として一貫しており、それゆえに入道の言動の非常識ぶりが際立たされるこ

とになるのだが、この対話はその典型といえよう。

入道は「罪に当たるとは、唐土にも我が朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとも人になりぬる人の必ずあることなり」、源氏が須磨に下ったのも、彼が格別に抜きん出た存在であることの証しであるとして反論するのである。周公旦・小野篁・菅原道真ら、不遇の賢才たちの故事が入道の念頭であろう。かかる発言から、漢才にもよく通じた、世に阿ることを潔しとしない、硬骨の政治家としての入道像が浮かんでもこよう。^⑤ さらにここで、入道の父大臣と桐壺更衣の父按察大納言が兄弟であるという血縁が、はじめて明らかにされる。父大臣・叔父の大納言が没し、家運が衰退していくなか、更衣の不遇の死を、中将であった入道は、どのような思いで見つめていたか、その苦衷は察するに余りある。更衣の死も、播磨下向を決断させた要因の一つであったろう。

さて、三月上巳の祓の日、源氏は突然の嵐に襲われた。十三日の夜、ようやく暴風雨が鎮まり、まどろみかけた源氏の夢に故桐壺院が現れ、「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」と命ずる(明石②二二九)。翌朝、渚には入道の迎えの舟があった。入道は「朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らずること」(同②二二二)があつて、源氏を迎えにきたのだという。「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ」(若紫①二〇二)との良清の言葉通り、明石の浜は風光明媚の地であった。周知のように、入道の邸は、民俗学的には竜宮との関連

が説かれ、また物語史における先蹤として、『うつほ物語』の吹上の長者、神南備種松の豪邸との関連が指摘されてきた。

入道の領じめたる所々、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、(A)興をさかすべき渚の苦屋、(B)行ひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三味を行ひ、(C)この世の設けに、秋の田の実を刈り収め残りの齡積むべき稲の倉町どもなど、をりをり所につけたる見所ありてし集めたり。(明石②二三三―二三四)

右は入道の住まいの描写である。興味深いことに、この叙述は、入道の複雑で多面的な人物像に対応しているとみられる。すなわち(A)では、四季折々の興趣を楽しむ風流人、(B)は、極楽往生を願って修行に励む敬虔な仏弟子、(C)は、娘の将来のため、蓄財に勤しむ卑俗で現実的な受領、という入道のさまざま側面を示すものとなっているのである。後にも「いときよげに、あらまほしう、行ひさらばひて、人のほどのあてはかなればにやあらむ、うちひがみほればしきことはあれど、古昔のものをも見知りて、ものきたなからずよしづきたることもまじれば」(同②二三八)とあり、老耄ゆえの偏屈さなどもあるが、名門の出身にふさわしい品格も備えた人物として語られている。

源氏を迎え入れたものの、その「いと気高う心恥づかしき御ありさま」に接すると、さすがの入道も気後れがして、なかなか娘のことを切り出せない。そうした二人の距離を縮めたのが、音楽

談義であった。望郷の念抑えがたい源氏は、琴の琴を手にし、広陵散を演奏する。「入道もえたへで、供養法たゆみて急ぎ参るのだった（同②二四〇）。

入道は「延喜の御手より弾き伝へたること三代」（同②二四二）という琵琶と箏の名手であった。それを「あやしうまねぶ者」がいるので、君にぜひともお聴かせ申し上げたい、と思わせぶりなことを言う。『白氏文集』「琵琶引」などを踏まえた軽妙で機知的な会話が続くことになるが、果たして入道の演奏は、「今の世に聞こえぬ筋弾きつけて、手づかひいという唐めき、揺の音深う澄ましたり」（同②二四三）という見事なものであった。源氏によれば、箏の琴は、嵯峨の皇女五宮が名手であったが、それを伝える者が絶えてないのだという。都では聞けなくなった楽の音が、明石の地にこっそり伝えられていたのであった。都を離れた地で、「みやび」が発見された、という一種の逆説がここにはある。都を放逐された二人には、いわば風雅の友という趣がある。

かかるやりとりを経て、源氏の入道に対する関心は深まっている。入道も「問はず語り」に娘のこと、あるいは自身の半生を語り始める。

「いと取り申しがたきことなれど、我が君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐れおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにやとなむ思つたまふる。

明石入道論（大井田）

そのゆゑは、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童のいとかなうはべりしより思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとに必ずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへとなむ念じはべる。前の世の契りつたなくてこそかく口惜しき山賤となりはべりけめ、親、大臣の位を保ちたまへりき。みづからかく田舎の民となりてはべり。次々さのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらむと悲しく思ひはべるを、これは生まれし時より頼むところなむはべる。いかにして都の高き人に奉らむと思ふ心深きにより、ほどほどにつけて、あまたの人のそねみを負ひ、身のためからき目を見るをりをも多くはべれど、さらに苦しみと思ひはべらず。命の限りはせばき衣にもはぐくみはべりなむ、かくながら見捨てはべりなば、浪の中にもまじり失せね、となむ掟てはべる」など、すべてまねぶべくもあらぬことどもを、うち泣きうち泣き聞こゆ。

（同②二四四―二四六）

こうして源氏が明石に身を寄せることになったのも、神仏の導きによる、という不可解なことを言い始める入道である。娘を都の貴人と結縁させるべく、住吉の神を十八年にわたって祈り続けてきた、その験はあらたかたか、こうして君をお迎えすることができた。かつては大臣を輩出した我が家も、宿世拙くていまや土豪に

まで落ちぶれているが、娘には期するところがあるという。「仮にても移ろひ」とは、源氏を前にしての言葉だから当然ではあるが、源氏の赦免、帰京を強く意識している発言である。史実に照らせば、罪に問われた者が召還されて本官に復す例は見られず、非現実的・楽観的といえる。しかし、入道には、源氏の輝かしい将来が予見されているのである。また「あまたの人のそねみを負ひ……」とは、貪欲・強引な擗取が、民からの反抗にあった、ということの意味しているのだろう。しかし、それも娘の将来、一族の未来を思えば、苦でもない、というのである。一族の復興のためには手段を選ばぬ、すさまじい執念が認められよう。と同時に「うち泣きうち泣き」、あるいは「うちわななきて涙落とすべかめり」(同②二四二)、「うちわななきたれど」(同②二四七)とあるように、娘の幸運を祈る親心が、見苦しいまでに語られているのも注意しておきたい。

とうてい信じがたい入道の話も、数奇な経験を繰り返してきた源氏にとっては、思い合わせられる節々が多いのだった。しだいに源氏は入道の不思議な魅力に吸い寄せられていく。かかる宿世を背負って生まれてきた娘に対する関心も並々でない。こうして源氏は入道の申し出を了承することになる。入道は「限りなくうれし」(同②二四七)、「思ふことかつがつかないぬる心地して、涼し」く思うのだった(同②二四八)。源氏は、岡辺の家に求婚の手紙を送るが、「人の御ほど我が身のほど」を強く意識する明

石君は返事をしない。

言ひわびて入道ぞ書く。「いとかしこきは、田舎びてはべる袂につつまあまりぬるにや、さらに見たまへもおよばぬかしこさになむ。さるは、

ながむらむ同じ雲居をながむるは思ひも同じ思ひなるらむとなむ見たまふる、いとすきずきしや」と聞こえたり。陸奥国紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。げにもすきたるかなと、めざましう見たまふ。

(同②二四八―二四九)

しびれを切らせた入道が代筆をする。本来、母親や女房がすべきものを、男親で、しかも出家者の入道が代筆するところが滑稽である。陸奥国紙に書き付けたというのも不調和である。娘の結婚のためには、なりふり構わぬ入道の変人ぶりが、笑いと驚きをもって語られている。そうした振る舞いを「いとすきずきしや」と自認し、源氏も「げにもすきたるかな」と思う。この「すきずきし」「すく」というのが、入道の特徴づけるキーワードの一つである。無骨で狷介ではあるけれども、名門の裔として、都の洗練された雰囲気を持つてはいないのである。

忍びてよき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ちぬ、輝くばかりしつらひて、十二三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。君はすきのさまやと思せ

ど、御直衣奉りひきつくりひて夜更かして出でたまふ。

(同②二五五)

尼君の反対も押し切って、入道は娘と源氏を結婚させる。用意周到に準備を進め、風情を凝らした演出もぬかりない。源氏はやはり「すきのさま」と思うのだが、洒脱な風流人としての入道の面目躍如たるものがある。このように、入道の風変わりさは、それが源氏をもひきつける大きな魅力にさえなっているとおぼしい。その人物像について、次節でさらに検討を加えよう。

三

その頃、都では「物のさとし」(同②二五一、二六二)が頻繁に起こり、朱雀帝も弘徽殿太后も病に煩っていた。太政大臣も薨去した。母後の反対を押し切って、帝は春宮への譲位と、朝廷の後見たる源氏の召還を決意する。帝が退位を考えた理由の一つに、二歳になる承香殿女御腹の皇子があつたことが挙げられる。折しも、明石の地では、六月頃から明石君の懐妊の兆候が見え始めた。明石君がやがて女兒を産んで、いずれ春宮となるこの皇子に入内する、という以後の展開は容易に予想されるところである。源氏の救免・明石君の懐妊という慶事がうち続くなか、入道は「さるべきことと思ひながら、うち聞くより胸ふたがりておぼゆれど、思ひのごと栄えたまはばこそは、我が思ひのかなふにはあらめ」

と「思ひ直」すのだった(同②二六二)。源氏が帰京し、そのま
ま娘が顧みられなくなる虞れもある。しかし、源氏の愛情と、子
まで儲けた幸運に、一族の運命を賭けるのであった。入道は、源
氏との別れを惜しみつつ、娘への愛顧を訴える。

かひをつくるもいとほしながら、若き人は笑ひぬべし。

「世をうみにこころしほじむ身となりてなほこの岸をえこ
そ離れぬ

心の闇はいとどまどひぬべくはれば、境までだに」と聞こ
えて、「すきすきしきさまなれど、思し出でさせたまふをり
はべらば」など御気色たまはる。(同②二六九)

偏屈で尊大な入道がべそをかくのは滑稽ではあるが、それだけに
痛々しい。入道の歌は、遁世者でありながら、現世への強い執着
にとらわれた自身の至らなさを言う。「心の闇」は、子ゆえの迷
妄を詠んだ「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬ
るかな」(後撰集・雑一・藤原兼輔)を踏まえている。明石にと
り残される娘を思いやると心が激しく乱れる、そうした愛情深い
父親として入道が造型されていることが理解されよう。では、道
心と、肉親への愛情、現世への執着とがどのようにかかわるのか、
次に考えてみたい。

「世の中を棄てはじめしに、かかる他の国に思ひ下りはべ
りしことも、ただ君の御ためと、思ふやうに、明け暮れの御
かしづきも心にかなふやうもやと思ひたまへたちしかど、身

のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば(中略)君のやうやう大人びたまひもの思ほし知るべきにそへては、などかう口惜しき世界にて錦を隠し聞こゆらむと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて(中略)若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、かかる渚に月日を過ぐしたまはむもいとかたじけなう、契りことにおぼえたまへば、見たてまつらざむ心まどひはしづめがたけれど、この身は長く世を棄てし心はべり、君たちは世を照らしたまふべき光しるれば、しばしかかる山賤の心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ、天に生まるる人の、あやしき三つの途に帰らむ一時に思ひなずらへて、今日長く別れたてまつりぬ。命尽きぬと聞こし召すとも、後のこと思しいとなむな。避らぬ別れに御心動かしたまふな」と言ひ放つものから、「煙ともならむ夕まで、若君の御ことをなむ、六時の勤めにもなほ心きたなくうちまぜはべりぬべき」とて、これにぞうちひそみぬる。

(松風②四〇四〜四〇六)

いよいよ明石を発つ娘に入道は、このように言う。この世での再会はあるまいと覚悟するだけに、いつになく長大なものとなっている。「心の闇」は前出だが、後の「心まどひ」も兼輔詠を踏まえていよう。「避らぬ別れ」は、「世の中に避らぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため」(古今集・雑上・在原業平、伊勢

物語・八十四段)による。「君たちは世を照らしたまふべき光しるければ、……今日長く別れたてまつりぬ」のあたり、『竹取物語』のかぐや姫の月への帰還を彷彿させるものがある。若菜上巻には「変化のもの」とあるが、これもかぐや姫を想起させるキーワードであった。先にもふれたように、明石君の出生には、申し子譚の発想が透けて見えるが、入道は、そうした娘を神仏からの授かりもののごとく、大事に傳っていたのだった。そして我が身が煙になるまで、若君の将来の栄えを祈り続けていようとの決意を示すのだが、かかる現世執着のさまを出家者の立場から「心きたなく」と自省しているのも注意されよう。さらに一族の将来への大望を抱く反面、「この身は長く世を棄てし心はべり」「命尽きぬと聞こし召すとも、後のこと思しいとなむな」と自身の栄華には拘泥していかないのも特徴的である。こうした入道の思考は、次の、妻子に宛てられた最後の手紙からもうかがえる。

「若君は、春宮に参りたまひて、男宮生まれたまへるよしをなむ、深くよろこび申しはべる。そのゆゑは、みづからかくつたなき山伏の身に、今さらにこの世の栄えを思ふにもはべらず、過ぎにし方の年ごろ、心きたなく、六時の勤めにも、ただ御ことを心にかけて、蓮の上の露の願ひをばさしおきてなむ、念じたてまつりし。我がおもと生まれたまはむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出

でて世を照らす。みづからは、山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。(中略)さらに何ごとをか疑ひはべらむ。この一つの思ひ、近き世にかなひはべりぬれば、遙かに西の方、十萬億の国隔てたる九品の上の望み疑ひなくなりはべりぬれば、今は、ただ、迎ふる蓮を待ちはべるほど、その夕べまで、水草清き山の末にて勤めはべらむとてなむまかり入りぬる

光出でむ暁近くなりけり今ぞ見し世の夢語りする

(中略) いにしへより人の染めおきける藤衣にも何かやつれたまふ。ただ我が身は変化のものと思しなして、老法師のためには功德をつくりたまへ。この世の楽しみにそへても、後の世を忘れたまふな。願ひはべる所にだに至りはべりなば、必ずまた対面ははべりなむ。娑婆の外の岸に至りて、とくあひ見むとを思せ。」

(若菜上④一一三―一一五)

明石女御が皇子を出産した現在、一族の将来について何の疑いもなくなつたという。さらに、自身の極楽往生も確実なものとなつた、という。いささかの飛躍が感じられなくもないが、入道においては、子孫の繁栄の延長線上に自身の往生が位置づけられているのである。自身「心きたなし」と思しながらも、一族の栄華追求という世俗的野心と、心穏やかに極楽往生を遂げようとする、崇高な信仰心とが、さほど矛盾なく結びついているのである。彼

明石入道論(大井田)

の世俗的野心と信仰心を繋ぎ止めているのが、神仏から授かった夢であり、それをひたすら信じ従うことで、彼の異数の運命が切り拓かれたのである。

むすび

源氏は、入道という特異な人物の数少ない理解者であった。

「いかに行ひまして住みたまひにたらむ。命長くて、こちらの年ごろ勤むる積みもよなからむかし。世の中によしあの濁り深きにやあらむ、賢き方こそあれ、いと限りありつづ及ばざりけるや。さも至り深く、さすがに気色ありし人のありさまかな。聖だちこの世離れ顔にもあらぬものから、下の心はみなあらぬ世に通ひ住みにたるところ見えしか、まして、今は、心苦しき絆もなく思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば、忍びていと逢はまほしくこそ」

(若菜上④一二六―一二七)

「世の中によしありさかしき方々の人」が、一皮むけば「この世に染みたるほどの濁り深」いものに対し、我執の権化のような入道が、実は、深い悟りを得た、極楽浄土に心を寄せた高德の人であると、源氏は称賛を惜しまない。明石君を前にしての発言であるから、いささか割り引く必要はあるにせよ、かなり源氏の本心を

語っているとみてよいであろう。源氏自身、敬虔な信仰心の持ち主であるだけに、入道の生き方に深く共感し、畏敬の念を抱くのである。かかる二人の姿を「法の友」と称してもよいかもしれない。いずれ別稿を用意したいが、源氏と入道の関係は、薫と宇治八宮のそれに通ずる点が多々あり、一種の変奏と見ることができ。

かの箱あけて御覧すれば、さまざまのいかめしきこと多かり。年ごとの春秋の神楽に、必ず長き世の祈りを加へたる願ども、げにかかる御勢ひならでは、果たしたまふべきことと思ひおきてざりけり。ただ走り書きたるおもむきの、才々しくはかばかしく、仏神も聞き入れたまふべき言の葉明らかなり。いかでさる山伏の聖心に、かかることどもを思ひよりけむと、あはれにおほけなくも御覧ず。さるべきにて、しばかりそめに身をやつしける昔の世の行ひ人にやありけむなと思しめぐらすに、いとど軽々しくも思されざりけり。

(若菜下④一六八)

入道の願文を目にした源氏は、その漢才のすばらしさに感心する一方、並外れた大望に驚きもする。やはり源氏をしても充分に理解しがたい不思議な魅力をたたえた入道であった。この世にかりそめに現れた昔の聖人であろうかと思ったりもするが、そのように思わせるほど、入道の情念は、源氏の人生に深く食い込んでいたのであった。源氏は「横さまにいみじき目を見、漂ひしも、こ

の人一人のためにこそありけれ」(若菜上④一二八)とも奇しき宿世を思っていた。

【注】

- (1) 阿部秋生「源氏物語研究序説」(昭和34年、東京大学出版会)
- (2) 注(1) 阿部氏前掲書、および秋山虔「播磨前司、明石入道」(『源氏物語の論』平成23年、笠間書院) など参照。
- (3) 注(1) に同じ。
- (4) 鳥津久基「明石入道と明石上のモデルに関して」(『紫式部の芸術を憶ふ』昭和24年、要書房)、石川徹「宇津保物語の人間像」(『平安時代物語文学論』昭和54年、笠間書院)。
- (5) 藤原克己「明石入道の人物造型」(森一郎編『源氏物語作中人物論集』平成5年、勉誠社) は、入道のかかる側面を重視し、前掲阿部論文などに見られる「没落貴族の野望」「家の再興の物語」といった従来の理解を「ステレオタイプ」として批判する。しかし、氏は、入道のある一面だけを強調し、ことさらに美化し過ぎてはいないだろうか。入道の卑俗な面や尋常ならざる執念を切り捨ててしまうことで、かえって入道の人物像が平板で魅力の乏しいものになってしまうと言わざるを得ない。
- (6) 石川徹「光源氏須磨流謫の構想の源泉」(注4前掲書)、東原伸明「源氏物語と『明石』の力」『物語文学史の論理』(平成12年、新典社) など参照。
- (7) 入道の音楽については、森野正弘「明石入道と琵琶法師」(『中古文学』62号、平成10年11月) に詳しい。
- (8) かかる記述から、丸山キヨ子「明石の入道の造型について」(『源氏物語の仏教』昭和60年、創文社) が入道の振る舞いを、「入道とは別個の生の、予め暗示され、かつ隠されたためたき宿世を、親として実現させてやるための、ただそれだけ一筋の世俗的行為」とするのは示唆に富むが、「一家

を興そうとしているのではない」と評するのは、いかがか。やはり前掲藤原論文と同様に、入道を美化し過ぎているように見受けられる。

Abstract*The Akashi Novice (Akashi no Nyudo)*

Haruhiko Oida

In many characters of *The Tale of Genji*, the *Akashi Novice (Akashi no Nyudo)* has intense personality. His father was minister, but his family was impoverished by misfortune. The pride of his social standing made him withdraw from capital to Akashi, to revive his family.

He was a typical avaricious prefectural governor, a devout Buddhist, an intelligent and conscience statesman, and he loved his wife and daughter. Thus he is a wonderful person, it is very difficult to understand him. His incompatible and complicated personality makes him attractive. The relation between *Akashi no Nyudo* and *Hikaru Genji* is very important. *Genji* was sure that *Nyudo's* prayer led him to Akashi. *Genji* also considered him a saint. *Genji* understood *Nyudo* quite well.